連載 二×法楽 (29)

「下足（げそ）」の文法

京都教育大学教授　森山（もりやま）　卓郎（たくろう）

何年か前、イカが泳ぐ姿をテレビで見たことがある。まるで魚のように身体を横にして、器用に前後に動き回っていた。イカの足が、まるで大きな口のような感じであった。不覚にも、子どものころから、イカの泳ぎというと、三角のところ（えんぺら）の方向へロケットのように飛ぶような泳ぎ方しか想像していなかっただけに、自分の無知を思い知らされるとともに、そのイカの姿がとても新鮮だった。

そこで質問。「イカの頭」ってどこでしょう。傍らで新聞を読んでいた妻に聞いたら、「三角のところかな」と言いつつ、「口が下の方だから、下の方かな？　無いのかな？」と言っていた。まあ、あまり「イカの頭」について真剣に考えたことがないということだけはわかった。

先日、中国の大連へ行ったとき、我々が「イカの下足（げそ）」と呼ぶ部分が、当地では「イカの頭」とされていた。あの泳ぐ姿を想像し、また、目や口のありかを考えてみれば、あの「下足」の部分は「足」というより、「頭の一部」なのだ、という発想に、なるほどという気がしてくる。

では、日本ではなぜイカのあの「下足」は、「下足」なのか。以下は私の予想。まず、タコの場合、身体の下にある、くにゃくにゃ曲がるあの吸盤のたくさんついた八本のものは「足」と言いたくなる。そして、タコとイカとのお魚屋さんでの姿は似ており、素朴なイメージは、まあ同じようなものだと言える。だから、やはりあのように長いものは「足」として考えられる。ここから、イカも「足」を持つということになった。――イカの「足」の成立は、想像するところ、こんな調子の連想ではないだろうか。

ちなみに、『日本国語大辞典』によると、「げそ」という形は、「下足」つまり「げそく」の略として江戸時代にも使われていたようで、特にイカの「足」のことを寿司屋さんなどで、「通」のみなさんがしゃれて「下足（げそ）」と呼んだというのが、由来のようである。ただし、個人的な意見を言わせてもらえば、食べ物としての「下足」という命名は、しゃれているのか、それとも、ちょっと行き過ぎなのか、よくわからないところではある。

いずれにせよ、私たちが人間以外の身体の部分をいかにとらえるかということの背景には、いろいろ発想の展開がある。

例えば、クラゲの傘の下にあるのは「手」か「足」か？　たまたま通りかかった中学生の娘に聞いたら、あれは「足」だときっぱり断言して去っていった。ただ、クラゲの「足」は下方にあっても、歩行には使われそうにない。だとすれば、あれは「手」だ、と考えることも可能である（「触手」という言葉もあるよな、と再考を促そうと思ったが、娘はもう去った後だった）。

ついでながら、生物学的な議論はともかく、素朴な我々の認識では、虫の仲間の「手」「足」の区別も難しそうだ。ムカデの「足」は「足」でいいし、カブトムシの「足」も、六本とも「足」だと言っていいかもしれないが、カマキリの場合だと、すべて「足」というより、「手」二本と「足」四本、というとらえ方をしたくなる。下にある、地面に接触する、移動に使うなど、いろんな性質がそれぞれに微妙にずれながらかかわって、「足」とか「手」とかいった概念に整理されているのではないだろうか。ザリガニや蟹（かに）の「足」と「ハサミ」などもおもしろいところであって、「ハサミ」は「足」とは区別される一方で、「手」でもないという気がする。

また、例えば動物でも、馬の足は四本だが、リスの足はといえば、二本なのか四本なのか、私なら迷う。

ものの名前とは、このような連想やいろいろな「見立て」によって決められている。ついでながら、こうした見立ては比喩（ひゆ）にもなっている。例えば、時計の「針」も、英語では「手」と呼ぶようである。形状でとらえるのではなく、身体の部分を比喩的に使うところがおもしろい。時を刻んで過ぎていくから「足」でもおもしろいと思うが、「手」で指すという発想なのだろう。日本語でも、「机の脚」などは「脚」という比喩的なとらえ方になっている。

さて、文法でも、文を人の体に喩（たと）えることがある。おもしろいのは、江戸時代の富士谷成章（ふじたになりあきら）という学者の文法論である。彼の品詞論は、「名」「装（よそひ）」「挿頭（かざし）」「脚結（あゆひ）」の四つの分類である。用語が特殊ではあるが、「名」、つまり名詞が身体に対応するのに対し、述語になる品詞、つまり動詞や形容詞などが「装」、つまり服に喩えられ、副詞や接続詞などは「挿頭」という頭の飾りに、助詞や助動詞は「脚結」という脚絆（きゃはん）のようなものに、それぞれ喩えられている。

「たぶん花が咲くよ」なら、「花」が体で、「たぶん」がかんざし、「咲く」が服、「よ」が足に巻くもの、といったイメージと言っていいだろうか。「名をもて物をことわり、装をもて事をさだめ、挿頭、脚結をもてことばをたすく（名詞で物を指定し、用言でどういうことかを述べ、副詞類や助詞・助動詞類で言語表現を助ける）」（『あゆひ抄』）という整理は、当時としては画期的なものである。

もし、文の構造をイカの姿に喩えるとすると何かおもしろい考え方ができるか、と一瞬考えたが、そんな愚にもつかぬことを考えていてはイカんと思い至ったのであった。